東アジア世界史研究センター公開講座

「遣唐使外交の終焉と東アジア・日本」

文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業の「古代東アジア世界史と留学生」の10年度公開講座「遣唐使外交の終焉と東アジア・日本」（社会知性開発研究センター／東アジア世界史研究センター主催）が7月10日、生田キャンパスで開かれ200人が2氏の講演を聴講した＝**写真**。

荒木敏夫同研究センター代表（文学部教授）の趣旨説明のあと、本学大学院文学研究科博士課程修了（平19）の皆川雅樹専修大学附属高校教諭が「モノから見た遣唐使以後の東アジアの交流」と題し、遣唐使によってもたらされたモノ（工芸品＝奈良・東大寺の正倉院にある宝物、書籍など形のあるもの）と、遣唐使派遣が終わった後には書籍などのモノがどのようにして日本にもたらされたのかを解説したほか、唐からの羊の贈答についても着目し、その政治的意義は今後の研究対象になりうると話した。

続いて佐藤宗諄奈良女子大学名誉教授が「大陸文化の『日本化』と国際交流―白詩と道真―」と題し、遣唐使らから伝えられた大陸文化が遣唐使以後どのように日本化していったのか、平安時代に伝えられた「白氏文集」や菅原道真の漢詩を題材にして講演した。

質疑応答で皆川教諭へ「なぜ羊にこだわるのか？」という質問に「群れを成す習性を持つ羊を数頭程度献上する必要があったのか、使い道も含め、なぞが多い。過去の資料や文献から羊の位置づけをたどるのもおもしろい」、また、「中国から漢詩が伝わってきた当時、日本ではどのように読んでいたのか？」との質問に佐藤名誉教授は「おそらく中国音で読んでいたのではないか」と答えるなど、聴講者の探究心がうかがえた。

文学部が高校教員を対象に研修プログラム

▲「『日本的な』仏教について」（出岡宏准教授）

▲ あいさつする矢野学部長

▲「北欧から学ぶ―ヨーロッパにおける環境保全と地域振興の共存―」（松尾容孝教授）

▲「教室指導へのまなざし」（田邉祐司教授）

▲「読書の社会的位置―浮世絵に見る読書図の変遷」（板坂則子教授）

▲「ガンディーはファシズムにいかに対抗したか」（田中正敬教授）

▲「光明皇后論―その実像と虚像―」（荒木敏夫教授）

文学部（矢野建一学部長）が2006年から実施している高校教員を対象とした研修プログラムが7月29、30の両日、生田キャンパスで開かれた。日本史・世界史・倫理・地理・英語・国語の各科目に約200人の参加があった。図書館で展示中の「光源氏転生　源氏物語千年紀プラス」の見学も行われた。

大学院商学研究科・東京信用保証協会の共同公開講座

「中小企業の価値創造」

大学院商学研究科（上田和勇研究科長）と東京信用保証協会による第6回共同公開講座「中小企業の価値創造」が7月31日、神田キャンパスで開かれ、中小企業経営者や後継者、学生など約100人が参加した＝**写真**。

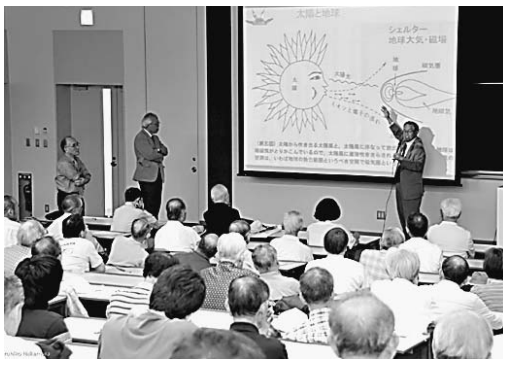
講演では、まず高橋義仁商学部准教授が「強い中小企業の分析～競争力の決め手は何か」をテーマに、独自の価値創造を果たし収益を上げている三つの中小企業の事例を紹介。競争力獲得の視点から基本戦略やバリューチェーンとの関連を検証し、強い中小企業の分析を行った。

続いて公認会計士・税理士の田中幸長氏が「中小企業の技術開発戦略～技術開発型ベンチャーの現場から」と題し講演。「日本の大企業が技術で勝っても事業で負けてきたのはなぜか？」と問題提起し、製品アーキテクチャ論を軸に、負けない中小・ベンチャー企業の技術開発戦略を探った。

上田研究科長がコーディネーターを務めたパネルディスカッションでは、高橋准教授、田中氏に加え、伊藤和憲商学部教授、日本生命相互会社・首都圏代理店第3部埼玉代理店営業第2部エージェンシーマネージャーの鈴木秀章氏がパネラーとなり、「強い中小企業の価値」について活発な意見交換が行われ、参加者からも多くの質問や意見が出された。

「太陽・太陽系の最新像」テーマに2講演

自然科学研究所公開講演会



自然科学研究所（所長・近藤正明商学部教授）主催の公開講演会が7月10日に生田キャンパスで開催された＝**写真**。13回目となった今回は「太陽・太陽系の最新像」をテーマとし、2講演が行われた。

まず、本学法学部非常勤講師・国立天文台名誉教授の木下宙氏が「太陽系のさいはて」と題して、歴史的な太陽系像から、最新の太陽系について、話題の「はやぶさ」などにも触れつつ、研究結果を紹介した。次いで、国立天文台名誉教授の日江井榮二郎氏が「太陽は23歳!?」と題して、太陽の基本的な様子から最新の研究成果を紹介した。特に、昨年、日本近海で観測された皆既日食の臨場感あふれる映像には参加者一同、改めて自然のすばらしさを感じることができた。参加者は、教職員、学生、一般など学内外から100人を超え、今後も最新の研究成果の発信を積極的に行ってほしい、連続の講座として開講してほしい、などの感想が寄せられた。（自然科学研究所）

訃報

西村　弘氏（にしむら・ひろし）経済学部准教授

7月18日、63歳で死去。告別式は同22日、町田市のコムウェルホール町田駅前会堂けやきで執り行われた。喪主は妻啓子さん。

専修大学北海道短大経済科講師、助教授を経て1986年、本学経済学部講師、88年助教授。主な担当科目は資本主義の原理ほか。

高校生のための英語学習法

楽しい英語学んだ

◀三浦教授

▶フリックマン准教授

文学部英語英米文学科の公開セミナー「高校生のための英語学習法」が7月10日、生田キャンパスで行われ、87人が英語の楽しさを学んだ。

三浦弘教授は「コメディドラマでENGLISH―通訳訓練法を初心者向けにアレンジ―」というタイトルで授業。

日本語字幕付きのコメディドラマのDVDを見て話の内容を理解。テキストや字幕を見ずに、耳で聞いたせりふをまねる発音練習〝シャドーイング〟をしたあと、2人1組になってスクリプト（台本）を見ながら逐次通訳の練習を行った。

三浦教授は「コメディドラマは、イントネーションが強調され分かりやすいので、学習に役立ててほしい」と語った。

フリックマン，ジェフリーC・准教授の授業は、「Information Gap Activities：英語習得への道」。2人1組で質問し合いながら空欄になっている情報を埋めていく学習法「インフォメーション・ギャップ」を用いて、人物の似顔絵を作成した。平易な英語で分かりやすく、時にユーモアを交えた説明に、高校生たちは楽しそうに講義に参加していた。

同准教授は「使える英語を『自分のものにする』には、間違いを恐れずに会話することが大切」と会話力アップのコツを語った。

専修人の新しい本

叢書 日本の安全保障 第4巻 国際安全保障論Ⅱ ―アジア・太平洋の「戦略文化」―

佐島直子・丸茂雄一著

07年に刊行された『国際安全保障論Ⅰ―転換するパラダイム―』と対をなす1冊。「国際安全保障」の理論的な側面を中心に、安全保障問題へのさまざまな接近方法を示した前作に対し、本書はアジア・太平洋地域に焦点を絞り、特に「戦略文化論」の観点から「問題の所在」を抽出している。

「『安全保障』は、端的に言えば、自らの『命』の問題である。今を生きる一人ひとりが、地球的規模での世界的恒久的発展と無縁ではない、と気づくことが『安全保障』を学ぶ第一義である」と著者は述べている。（内外出版・本体2200円＋税）

著者（さじま・なおこ）＝経済学部教授。主な担当は安全保障論。（まるも・ゆういち）＝法学部非常勤講師。主な担当は教養特殊講義。

大相撲行司の伝統と変化

根間　弘海著

相撲の研究を趣味とし、教養ゼミナールで「相撲文化」を教える著者が、これまでに発表してきたものの中から、「相撲行司」にかかわるものをピックアップし、加筆修正した。

相撲の世界ではもちろん力士が花形であり、さまざまな視点から研究されてきたが、いわば「脇役」の「行司」についての研究はそれほどされてこなかった。資料や文献が非常に少ないためである。

本書では9つの話題を取りあげており、第3章「行司と草履」、第6章「行司の帯刀」、第7章「帯刀は切腹覚悟のシンボルではない」など興味深いタイトルが並ぶ。

読めば「相撲」を観戦する「視点」が変わるかもしれない。（専修大学出版局・本体3600円＋税）

著者（ねま・ひろみ）＝経営学部教授。主な担当は英語読解ほか。

フィラデルフィアの宗教とその社会

日系アメリカ人キリスト教徒の物語を中心にして

川上　周三著

本書の目的は、アメリカ合衆国東部にあるフィラデルフィア市の創立精神と関係づけて、日系アメリカ人キリスト教徒の物語を描くことにある。フィラデルフィア市の創立理念は、友愛と平和主義である。自由で寛容な精神のキリスト教の一派、クエーカー教徒のウィリアム・ペンによってこの町は作られた。

西海岸の日系アメリカ人キリスト教徒は、日米大戦後、収容所に入所させられた。その日系人を助けたのもクエーカー教徒であった。彼らは、収容所解放後、アメリカ東部シーブルックの農産物工場で働き、その後、日系人に好意的なフィラデルフィアに移住し、そこで、日系人教会を形成するに至った。この軌跡を調査により裏付けている。（専修大学出版局・本体2400円＋税）

著者（かわかみ・しゅうぞう）＝人間科学部教授。主な担当は比較社会論。